

「三分間のドラマ」

根来 滢子

人生の最晩年になって、「カラオケで歌う」という趣味を持たずにきてしまったことを、とても残念に思うようになった。この娯楽は二、三十年まえから全盛をきわめ、きらびやかに装った店は街中いたるところにあり、ホテルでもカラオケボックスを設けて客を誘っている。歌うことがすきで、また歌が上手な友人たちについて行って、彼らの歌を聴いているのはすきだ。社交ダンスに熱中していたころはよくこじんまりしたダンスホールにいつてカラオケタイムを楽しみにしたものだ。

流行歌といわれるもの、フォークソング、抒情歌など、戦前の古い歌もよく記憶にある。藤山一郎の「酒は涙か溜息か」や霧島昇の「だれか故郷を想わざる」など我ながらよく知っていると感じるほどだ。「何年うまれ？」と聞かれそうだが、小学校の時に終戦を迎えた私は、軍歌にもくわしいのだ。伊藤久男の「暁に祈る」は三番まで歌詞を知っている。

それなのに私自身は歌ったことがない。歌うという努力をしてこなかったこともあるが、音痴ではないと思うのだが、音程の幅が少ないように感じる。そんなわけで自分では歌ったことがなくても聞いているだけで楽しい。

カラオケ全盛の現在、プロ顔負けと思えるほど上手な人も多い。私の仲間は年齢から言って演歌を歌う人がほとんどだが、節まわしよろしく、情感をこめて歌う。私はただただ感心して聞き入る。昭和四、五十年代、「アイドル歌手」と呼ばれた十代の少年、少女の歌手が続出した。彼らは振付けよろしく、かわいらしい身振り手振りで歌って一つの時代を築いた。当時、同じ年頃の娘を持つていた私は彼女たちと一緒に沢田研二や中森明菜に夢中になったものである。ちなみに沢田研二のライブは二度聞きにいった。若い子と一緒に立ち上がって手をふったものである。

フォークソングは延々と、単調とさえ思える歌詞でストーリーを繰り返すが、恋のテーマが圧

倒的に多い演歌も、失恋の悲しみ、別れの辛さ、恋するものの苦しみの歌詞をわが身のごとくに切なく歌う。コーラスのようにただ美しく歌い上げるだけではだめなのだ。ドラマチックに、主人公の気持ちになりきって悲恋の女を演じなくては聞く人の心を打つことはできない。

また往年の歌番組の名司会者が言ったことだが、「演歌は三分のドラマである」ということ、まさに三分の短い時間のなかに織り込まれ、凝縮された人間模様がある。歌詞とメロディによって物語は劇的に紡ぎだされ、時として聞くものを、時空をこえて過去のある瞬間に呼び戻し、現在のわが身を突き動かすほどの感動を与えるのである。

いろいろなレパートリーでビックな歌手は多い。演歌の美空ひばりは没後二十数年になるというのにいまなお歌い継がれ、メディアにとりあげられ、彼女を超える演歌歌手はいまだ出現していないといわれている。人それぞれの好みはあるだろう。私は自分の青春時代を中心に、当時の流行歌に詳しいと自ら任じていたのだが、最近の若い歌手の歌はほとんど理解できない。今年の正月に四〇代の娘と、二〇歳の孫と三人で熱海のホテルに

一泊して、彼女たちのカラオケにつきあったのだが、孫の歌う歌は、初めて聞くものばかりで若い世代には私のまったく知らない世界があるのだとショックをうけた。「はやり歌」というのは所詮、時代と切り離せないものである。

私にとって好きな歌はといえば抒情的なもの、ありふれているが「桜貝のうた」とか「勿忘草をあなたに」などをあげる。昭和三〇年代のまさに青春時代、ラジオ歌謡で歌われた古い歌である。聞いていて心地いいし、青春の日々がちらちらして、そこはかかないセンチメンタルをさそわれる。フランク永井の「有楽町で会いましょう」や「西銀座駅前」など、流行していたころの銀座の情景が鮮明に浮かぶ。

しかし、衝撃的な歌は？といわれたら、次の四曲をあげる。好きとか、嫌いとか問う以前に、聴くだけである種、ぞくつとするようなショックを感じる歌である。なぜか鳥肌がたち、胸をえぐられるような動揺を受ける歌である。それらの曲についてふれてみたいとおもう。音楽の旋律を言葉で表現するのは難しい。いや不可能だと思う。音楽は耳で聞いて理解するものであり、どんな形容

詞を弄しても文章で伝えられるものではない。それを承知で書く。あなたがまだ聞いたことがないのであれば、どうかインターネットの「youtube」を検索して聴いてみてほしい。

① 「人生は過ぎ行く」(曲名) 越路吹雪

越路吹雪について。一九二四年(大正一三年)東京生まれ、宝塚歌劇団の男役スターとして活躍。同期に月丘夢路、乙羽信子がいる。一九五一年(昭和二十一年)退団。東宝の専属スターとして映画、演劇にも活躍。その後、歌手としてフランスのシャンソンを日本語でカバー。岩谷時子の翻訳で数多くの曲を日本に紹介した。

日生劇場のリサイタルは有名である。フランスのシャンソン歌手「エディット・ピアフ」の生涯をドラマチックに演じて、春と秋、年に2回、一か月に及ぶロングリサイタルを行ったが、固定した熱狂的なファンが多くて、チケットの入手が難しいライブステージの一つといわれた。

一九八〇年三月、日生劇場での五三回目のリサイタルが最後になり、同年11月、胃がんのため、逝去した。五六歳であった。

越路吹雪のシャンソンの代表曲は「愛の賛歌」であろう。その他、「バラ色の人生」「ろくでなし」「メランコリー」など、ピアフのもち歌を歌い継ぎ、数多くのシャンソンを歌った。

まさに「シャンソン歌手越路吹雪」であった。フランスのデザイナー、ニナ・リッチと、イヴ・サンローランのドレスを愛用したという彼女はいつもシンプルなロングドレスを愛用して美しかった。

その中に強烈な印象を残す歌がある。「人生は過ぎ行く」である。

歌詞はアドリブ的なリフレインが多く、彼女の場合、そのままを表現するのはむずかしいが、大体次のようである。

・・・「人生は過ぎ行く」・・・

好きよ 好き 好き (囁くように幾度もくりかえす)

おそかったのね でもいいの 好きよ うれしいわ そばにいてくれて

人生は過ぎ行く ラ・ヴィ・サ・ヴァ 好きなのに どうして

好きよ　いつまでいてくれる　好きよ　あの人
待っているのね

愛しているのね　そうね　ひどいわ

人生は過ぎ行く（リフレーン）　恋も去りゆく
どうして　二人の隙間を

どうして　助けて　好きよ　あの人そんなに

きれい　かわいい？　若いのね　私より

私はもうだめ　言わないで　行くなんて　人生

は過ぎ行く　私を残して

二人の隙間を　去りゆく　捨てないで！

「好き」という言葉と「人生は過ぎ行く」、と

「ラ・ヴィ・サ・ヴァ」はリフレーンとして何度
もくりかえされ、その言葉の中に強烈な想いを秘

める。自分より若くてかわいい人に心変わりして

いく恋人への悲しみに満ちた思慕のうたである。

それを越路吹雪は迫真の演技で迫る。最後の「捨

てないで！」という絶叫は彼女の魂の叫びである
う。

② 「夜へ急ぐ人」（曲名）　ちあき　なおみ

ちあきなおみ、一九四七年（昭和二二年）東京

生まれ、五歳のとき、日劇の初舞台をふむ。米軍
キャンプ、ジャズ喫茶、キャバレーなどでうたう。
一九六九年、「雨に濡れた慕情」で歌手デビュー。

代表曲に「喝采」「紅とんぼ」「矢切りの渡し」な
ど、多数。一九七八年、郷鉄冶（俳優宍戸譲の

弟）と結婚、しかし、郷は一九九二年癌で逝去す
る。茶毘にふされるとき、「一緒に焼いて」と号泣

したという話は有名。その死別を機に、一切の芸

能活動を休止した。公の場所に姿を現すことがな

くなつた。が、その後も彼女にたいする評価は高

まり、二〇一三年、一月にNHK総合「Son

gs」でちあきなおみの曲が特集された。

昨年年末、NHK紅白歌合戦での美輪明宏の

「ヨイトマケの歌」はちょっとした話題を提供し

た。常日頃の豪華な女装ではなくシンプルな労働

者の姿で、ヨイトマケに従事していた母親をうた

った心に染み入る歌である。美輪明宏にたいする

認識を新たにした人も多いだろう。

ちあきなおみについても同様の特筆するような
ことが起こつた。

昭和五二年暮れ、NHK紅白歌合戦に出場した
ときのことである。

一二月末の夜、一家団欒でくつろぎ、紅白に聞き入ってほとんどの家庭では突然、黒の、身体にびったりとはりついたドレスを身に纏って現れたちあきなおみが、うつろな目をして、ロングヘアをふりみだし、発狂状態の女が絶叫するようなうめき声をはりあげて歌うステージをみて凍りついた。紅白の華やかな雰囲気にふさわしいとはいえない登場であった。

白組の司会をやっていたNHKのアナウンサー山川静夫が、「なんとも気持ちの悪い歌ですねえ」とつぶやいたほどの過激なパフォーマンスであった。作詞、作曲は友川かずき、歌詞は次のようである。

・・・夜へ急ぐ人・・・

(私の中に夜がある 小さいころから私の中で
私の心をみすえてきた 暗い、暗い夜がある)
夜へ急ぐ人がいりや、その肩止める人もいる
黙って過ぎる人がいりや 笑ってみてる人もいる
かんかん照りの昼は怖い 正体表す夜も怖い
燃える恋ほど もろい恋
あたしの心の深い闇のなかから

おいで おいで おいでをする人 あんた誰
(ネオンの海に目を凝らしていたら、波間にうごめく影があった。小舟のようにあっけないそれらの影は、やがて悲しい女の群れと重なり無数の故郷という涙をはらんで逝った)

にぎやかな夜の街でかなわぬ夢の わかれいくつ
勇気で終わる恋もありや 臆病で始まる恋もある
かんかん照りの昼はこわい

正体表す夜もこわい

燃える恋どもろい恋

あたしの心の 暗い闇の中から

おいで おいで おいでをする人 あんた誰

歌詞を見る限りではそれほど過激ではないのだが、それを演じるちあきなおみの鬼気せまるゼスチャが強烈なのだ。「暗い闇の中から おいでおいでをするひとあんた誰」とすごい形相で手招きをする。そうして顔をゆがめて意味不明の絶叫。なごやかに団欒の時を過ごしているだろう年越しの夜にこの歌はあまりにも突飛であった。アナウンサーの山川静夫の感想は、紅白の司会者として言うてはいけないせりふのように思えるが、アドリ

ブなのか、リハーサルもやってこの曲のすごさは十分に知っているはずなのだが、本番のパフォーマンスも聴衆のリアクションも予想をはるかに超えたものだった。

そのせいかどうかはわからないが、それまで連続年八年紅白に出演していたのが、翌年から彼女のすがたは紅白の舞台で見ることがなかった。この曲をカバーできる人はまずいないだろう。まさにちあきなおみあつての演歌である。タイトルの「夜」へ急ぐとはどういうことか。おいでをする人はだれか、地下鉄のなからしいシンプルなバツクにただずんで、狂気の女はあの世へとリスナーを導いていく。

③ 「ナラタージュ」(曲名) 梓みちよ

真っ白のドレスをまといワイングラスを片手に持ち、すねたような歩き方で、白い、幾重にもかさねられた布を張り巡らせたような背景のなかに登場する梓みちよ。青いアイシヤドウでくまどられた挑発的な目。ショートの濡れたようなヘアが顔にみだれる。セクシヤルなオーラ。そうして低いこえで囁くように歌いだす。

作曲は筒美京平、阿木燿子の歌詞はまことに一片のロマンをみるようで泣かせる。歌詞は長いが引用する。

・・・ナラタージュ・・・

おいおい話すけれど出生の秘密は複雑で

上の兄貴と下の兄貴が、みんな父親が違っていて

ママは女手一つで育てたわ

三つの年には母親の口紅盗んで化粧をしたの

「ママと私とどっちがきれい？」頬をつねられ、しかられたけれど

小学校ではよく目立ち、学芸会では主役もやった

ママは一度も来なかつたけれど、舞台衣装が似合っていた。

中学時代の初恋は、スポーツクラブの上級生ね

背中をそっと抱きしめられる そのことばかり思っていたの

お酒のついでで、ごめんなさいね もう少しだけ聞いてくださる

退学通知の学校に私のほうも未練はないわ

ママはそのときあきらめ顔で、仕方がないと横

をむいていた
愛する男ができたとき、子供がほしいと本気で
おもおう

彼とふたりで訪ねてみたらママは無言で泣いて
いた

別れるいやだと絡み合い、男はワイシャツ真っ
赤に染めた後

冷たくなった　ママもそのころ死んでいた

いよいよ話すけど出生の秘密は複雑で

上の兄貴と下の兄貴がみんな男の子だったから

ママは女の子が　そう欲しかった

ママをとつても愛していたから

ママにとつても愛されたかった

「あなたはいまのいままで私を　女の子だと思
っていたの

ママ　アイラヴ　ソウ

何度か繰り返し返される「ママ　アイラヴ　ソウ」

というリフレインを高らかにうたい上げる。

クライマックス、「今のいままで女の子だと思つて

いた？」で高笑い、ワインをボトルごと胸をめが
けてふりかける。白いドレスは瞬く間に真っ赤に
染まつていく―まるで鮮血のように。

阿木燿子はすごい歌を作詞したものと感心する。
樫みちよの表現力を得てこの歌は完成した。マニ
ッシュなメイク、「女の半世紀」。いや、いうなれ
ば「ゲイ」の半生なのだ。父親の違う二人の男の
子を持つていたから、三人目は女の子がほしかつ
たという、愛するママのために、三人目のボクは
女の子になろうとした「ニューハーフの半世紀」、
それを綿々と歌い上げる彼女の力量に感心してし
まう。

④ 暗い日曜日 (曲名)

ダミア

第一次世界大戦後、ヨーロッパは疲弊し、若者
は生きる希望を失っていた。ナチスドイツによる
軍事侵攻がせまるなか、明日のみえない世の中に
自殺者が出てもおかしくない世相であった。

一九三三年、ハンガリー人ラーズロー作詞、レ
ジェー作曲による「暗い日曜日」のレコードが発
売されると瞬く間に巷に浸透した。更に、フラン
スのシャンソン歌手、ダミアがフランス語で歌つ

て世界的に有名な曲になった。陰鬱なメロディと歌詞に触発されて絶望した人々の共感を呼び、自殺者が続出した。作曲家自身も自殺をしてみましたという。やがて「自殺ソング」とまで呼ばれるようになり、各国で発売禁止になっていく。日本でも「厭世ムードを助長する」として一九三三年、発売禁止になったと聞く。この年、三原山で年間千人ぐらいの自殺者がでたというから、曲を別にしても人々はあの時代の重苦しい雰囲気絶望していたのだろう。

戦前の日本では淡谷のり子が、作詞は不明だが日本風にアレンジした歌詞で歌っていたようである。戦後は美輪明宏、越路吹雪、岸洋子、金子由香利など多くのシャンソン歌手がカバーした。

二〇〇二年、日比谷シャンテ・シネでドイツ、ハンガリー合作映画「暗い日曜日」が上映される（ロルフ・シュベール監督）、観に行った。作曲者が主人公のラブ・ストーリーが中心であったが、ヨーロッパの宝石といわれるブダペストの街並みの美しさ、ナチス台頭の暗い影、ホロコーストの悲劇なども織り交じって、バックに流れる暗い日曜日のメロディが何とも切ない効果をもたらして、

この曲は私にとって最高の「忘れがたい歌」となった。

「暗い日曜日」は小学生のころからよく聞いていた。六歳年上の、当時女学生だった姉が歌っていたのだ。上の兄や姉とは一〇歳近く年が離れていたもので、六歳年長の姉は私にとって一番親しい存在であったが、二八歳で逝去した。終戦直後の混乱期、アメリカ兵が日本に進駐し、私の住む地方の小都市も例外ではなかった。姉が英語を習っていた交際相手のアメリカ人は軍服を着ていない、背広姿の人であり、どのような任務で日本に来ていたのか、もはや知るすべもない。姉の話題は我が家ではタブーなのだ。偏見に満ちた田舎の小都市での、アメリカ人との恋は到底実らなかった。姉は造り酒屋に嫁いだが、何度も家出をくりかえし、自らの体をさいなむように脳を病んで亡くなった。私も二〇歳をすぎていて、姉の手助けができたはずなのに何もしなかった。私たちは、当時流行した箱型の「電蓄」といわれたスピーカーで、「ブルースの女王」淡谷のり子の歌う「暗い日曜日」を繰り返し聴いた。

歌に人を殺すような力があるのだろうか。限り

なく落ち込んでいるとき、断崖の果てに背中を押すような力、歌の魔力、それに魅せられて自らの命を絶つという瞬間の悦楽はどのようなものであろうか。

次の歌詞は直訳ではない。歌い手によつてそれぞれ訳の違いがあるようで、これは私がいつも聞いて親しんだ淡谷のり子の「暗い日曜日」である。

・・・暗い日曜日・・・

忍び泣くはだれが影ぞ、星は寒く窓にながれ

君が涙胸をうつ

今宵ひとり待てどむなし

月なきに影は失せ 君は永遠にかえりこず

ああ永遠に

君がたためにわれは泣けり

窓に伏して哀れ今日も

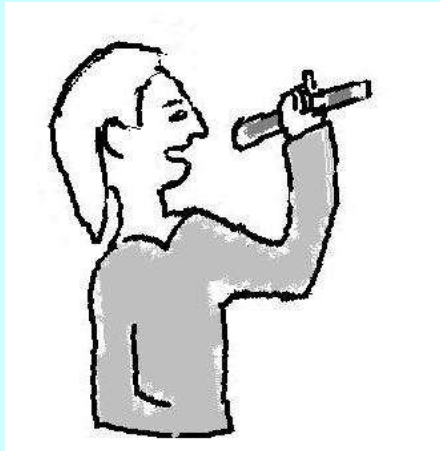
過ぎし夢を嘆き泣く

恋も幸もきえてわびし

ほほえみて吾も行かん

はるか遠き君が道

ソンプル・デモンシユ (暗い日曜日)



(二〇一四年 六月)